
僕らのミステリー考察

来栖 優希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らのミステリー考察

【Zコード】

Z7940P

【作者名】

来栖 優希

【あらすじ】

いつ何時も平凡を望んでいた高校生。

しかし、次第におかしな展開に巻き込まれていく。

主人公独自の視点で見た都市伝説考察ストーリーが始まる。

読み始め（前書き）

あくまで独自の視点で見たストーリーです。
ここは違つ、と思われても主人公の勉強不足と把握してください。

読み始め

昼休みに寝た振りを決め込んでいた僕。そして理由もないのに無心になる。

今年高校生になつて、一ヶ用経つた今でも、未だに僕はクラスに馴染んでいない。

まあ別に友達なんて作らなくとも、高校生活ぐらうあつとこつ聞に終えてやるつもりだ。

今日は無心になりきれていない。それは周囲がやかましいから。やかましいのは僕以外にどつては普通なのかもしれない。だけども、やかましいと思う原因はいつもの賑やかさじやないといつ事だ。

「ねえ、聞いた？ウチらの地区に口裂け女が出たんだって……」

寝た振りをしてこると知らず、隣の女子が会話する言葉だけがハツキリと聞こえる。

しかし今なんて言つたの？聞き間違いじゃなければ、口裂け女とハツキリと聞こえたが。

もう少し会話を盗み聞きしてみようか……。

「聞いた聞いた。ウチの高校の男子が襲われたらしこよ……」

「でも口裂け女なんて噂じやね？なんつーの……ああ都市伝説だつけ？」

喉を傷めたような女子のダマ声が答えてくる。次いで、マジで、ウ

ソだー等とひそひそ聞こえる。

男子が襲われた、と。誰に? 口裂け女と言つたのだろうか? 小学生
じゃあるまいし、そんな話を

鵜呑みにしているのか。馬鹿馬鹿しい。

僕は体を起して、机の中に入れていた眼鏡を掛ける。
もう少しで授業の時間だ。移動しなきやいけないし、せつせつと教室
を出よう。

「都市伝説って言えばさあ、この学校にオカルト部つてモンがあるの知ってる?」

茶髪ゴリラみたいな男子が、女子グループの会話に混ざつていた。
気付かなかつたな。

口裂け女とやらは興味がないけど、そんな部活紹介にもなかつた名
前は興味がある。

案の定、何それ、と返事が聞こえた。

「オレも知らねえ。噂だからな。相当、根暗そうのが多いんじ
やね? 大河内みたいなとか」

ピクッと反応した。これ以上そんな話を聞いても仕方ないので席
を立つ。

「そうかもね」

茶髪ゴリラに返事をしておいた。

移動教室でもやはり話題は、口裂け女の話で溢れていた。

授業を始めている教員も、ほとんど呆れていた様子が見てとれる。

眞面目に授業を聞いているこつちが大変だった。

授業が終わり、生徒がそれぞれの事を始める放課後。
部活する人もいれば、友達と帰る人もいる。僕のように意味もなく
残る人もいる。

朝方にも口裂け女の噂程度で、あんなにざわざわと騒いでいたのが
嘘のようだ。
こうやって柵越しの屋上から見下ろしている僕も噂に遊ばれたのだが。

今日もまた平凡な一日が終わるようだ。

つまらない人生、暗い奴だな、僕をそう思う人間は多いだろう。
けど、何にも関わらないで普通に過ごしていく事に悪い事じゃない。
平凡が一番だ。

何か刺激を求めて生きているのなら、自分で刺激を起こすべきだと
思う。

戦場にでも行ってくれ。

：と、屋上入口から視線を感じた。

衣服の擦れる音も聞こえたので振り返らずにはいられなかつた。

関わる前に立ち去らなければ…。

「『』めんなさい、黄昏の邪魔をしたかな？」

少し赤くなってきた空だと呟つのに、声を掛けってきた彼女は綺麗な白い肌をしていた。

真つ黒なロングヘアで隠れていたとしても目立つぐらい、綺麗だった。

何か違和感を感じた僕は学生鞄を拾つ。

「あ…、いえ…失礼します」

立ち去るとしか考えてなかつた僕は、少し釣り上つてる目を見て言葉を返した。

靴の色が違う事から、上級生だろうか。確かに一年生のカラーだったかな？

自然と敬語で返したのは意識していたからだ、と僕は思つ。

が、上級生の脇を抜けようかと思った矢先、手首を掴まれた。

馴れ馴れしく手首を掴まれた事にギョッとした僕は、彼女の顔を見た。

「…フフッ。 そんなに警戒しないで？」

目を細めた笑顔だった。近くで見ると尚更綺麗に…じゃない。笑顔だった。笑顔だったのだが、何故か僕は恐怖を感じた。

「あの… 僕に何か用ですか？」

わざわざ手首を掴まれたんだ。僕に用があつて来たんだろう。

自分でも声が震えていたのが、情けなく感じた。何だらつ、態度が気に入らなかつた、か？

彼女はまた、「めんなさい」と言つて僕の手首から手を離した。

「新入生よね？キミはひょつと興味があつたの」

やはり僕に用事があるひじい。

「いつも屋上に来るあなたが見えたの。少し心配ですね」

心配…って。興味つてそういう事か。要するに自殺するんじやないかと思つたのか。

はあと溜め息を吐いた僕は苦笑いを作つた。

「自殺するんじやないかつて思つてるんですか？」
「思い詰めたような表情をしてたからね」

間髪入れずに言葉が返ってきた。でも違つたみたい、と彼女は二口ツと笑つた。
やつぱりそういう思つてはいたひじい。でも、これで会話は終わつしそうだ。

そりですかと言つて、会釈をして出て行く、と考えたのだが。

「キミは今つまらないと思つてるんじやない？」

透き通つた目は未だに僕の目を見ている。目を反らして返事をしていの僕に対して、
顔を動かす事無く、まっすぐと僕を見つめていた。

けど何で他人にそんな事言わなきゃいけないんだろう。

「そんな事ないです」

「ううん、思つてゐる」

まだ。何なんだこの人は。

僕の今を否定されたような気がして、少し苛立ちが沸いてきた。

「平凡こそ最高じゃないですか。こんな平和が一番だと思います」

言つてやつた。これは親に対しても決まり文句だつた。

同時に中学生の時にも、小学生の時にも。こう返されると人は何も言えないのを僕は知つてゐる。

平和なんてつまらない、なんて反論されたケースもあるけど、じゃあ自分から派手な事をしてみたら
と煽つてやる。当然、口ばかりの奴等だけだったから何かした試しはない。

この人は。

「…少し外に出たらどうかな?また違つた平凡が見えてくるのよ

逆だつた。言い返される事がなかつた僕に、その言葉の反論はできなかつた。

決して怒つてているわけではない彼女はまた笑顔を作る。

「高校一年生でそんなネガティブだと体ダメになるよ。今は輝かなくちや」

野球のボールをノックする音が空に響く。

静かな空気になつた時、彼女はブレザーのポケットから一枚に折ら

れた紙を取り出した。

そして僕の前に両手で差し出した。

「良かつたらどうぞ。これがキミにとっての平凡になるとと思うな
ら

丁寧に差し出された紙を受け取る。そこには入部届と書かれた紙があつた。

もちろん白紙だった。僕が疑問符を浮かべた事を顔で悟つたのか彼女は。

「輝きたいって思うのなら、また明日の放課後。この屋上に来て
ね」

再び笑顔を作る彼女。

ここで僕も悟らせてもらつた。

「…もしかして今までの話は部活動誘ですか？」

笑顔だつた彼女は、呆けたような表情になつた。

そして、しばらく黙つた後。最初に声を掛けられたような視線を見せた。

あの時は笑顔に見えたのだが、こんな怪しげな笑顔が僕に向けられていたのか。

目を細め、口の端を少し釣り上げた笑いは妖艶に例えられる。

「どうかな？」

一瞬のつむじ風が彼女の髪を横に流した。

「あ、そうだ」

彼女が、自分の顔の前で両手をパチンと叩く。そして終始見せていた穏やかな表情で、僕に告げられる。

「私は斎藤夕妃^{さいとうあやひ}って言つの。君の名前を聞いてもいい？」

参つた。誰かと関わるつもりはなかつたのだが、こんな形で他人と知り合うなんて。

僕の名前を教えた瞬間、僕はこれからこの人と他人ではなくなる。知り合いになる。

はあと盛大に溜め息をついた僕は名前を教える事にした。

どうせ明日ここに来なければいいだけの話だ。それであれば関わる必要はない。

精神的には減るものがあるけれど、今現在を乗り切る上では別にいいだろう。

斎藤さんの疑問符を浮かべた顔が僕を見ている。

「大河内雅斗^{おおこううちまさと}です」

眼鏡を直しながら僕は、少なからずの違和感を覚えていた。何なんだろうか、一体。

「大河内雅斗君。カッコいい名前だね」

斎藤さんが再び笑顔を見せた。まだ、また違和感がある。そういうしている内に長い髪をなびかせながら、斎藤さんは屋上入

口くと足を戻して行つた。

「じゃあね。雅斗君」

手を振りながら去つて行く彼女。

それに答えるよつて僕は軽く頭だけ下げる。

…が、すぐには斎藤さんは立ち止り、振り返つた。

「あ、そうそう。口裂け女に気をつけてね？まだ出没してないし
いから

そう言えばそんな噂があつたつけ。この人もそのままのを信じてる
口かな。

気をつけます、と当たり障りのない返事をした僕。ニコッと笑つた
彼女は屋上から出て行つた。

なんだかいつもの回り口じゃない。

「調子狂うなあ…」

僕は頭を搔きつつ、そうボヤいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7940p/>

僕らのミステリー考察

2011年1月3日18時34分発行